

豊田高広氏 講演



自己紹介

豊田高広(とよだたかひろ)

1958年、静岡市生。静岡市役所入所後、94年から図書館。開設準備にあたった御幸町図書館(LoY2007優秀賞)で06年から館長。10年4月、愛知県田原市図書館長として単身赴任。「公共図書館員のタマシイ塾」実行委代表。

著書(共著)

『図書館はまちの真ん中』(勤草書房)

『市場化の時代を生き抜く図書館』(時事通信社)

■ 1 公共図書館の三つの「支援」



この講義の流れ

- 1 公共図書館の三つの「支援」
- 2 課題解決支援の三つの局面
- 3 田原市図書館の取り組みから
- 4 これからの市町村図書館の役割と可能性
- 5 図書館をどう立ち上げるか

今日の講義については、講義というといかめしいですが、かたく考える必要はないんですが、まず最初に、どうして公共図書館が必要なのか、その必要性を実現するために、私はよく三つの支援という言い方をするんですが、どんなことをするのかというお話をかいつまんでいたします。その三つの支援の中で、ある意味一番わかりにくい、課題解決支援、しかしこれが非常

にいま重要になってきております、この話を少しいたしまして、具体的に田原市の図書館においては、これを受けて、どんなことがされているのか、というお話をします。

最後に、これからの市町村立図書館の役割と可能性、そういう図書館をどう立ち上げるのか、このへんを網羅的に述べるというよりも、前回の嶋田さんのお話なども受けて、ポイントとして考えていきたい、というような話をさせていただきます。

◇ 1-1 図書館はなぜ必要か？

図書館はなぜ必要なのか、という話について、私はこのように考えております。地域にはいろんな人が住んでいらっしゃるわけですが、どんな人であっても、その人の望む知識や必要な情報を手に入れることができる、そういう使命を持ったただ一つの機関である、これがやはりポイントだと思います。どんな人でも、というのには、たとえば、



1-1 図書館はなぜ必要か？

「どんな人」でも
望む知識・必要な情報を
手に入れることができる
「ただ一つ」の機関。

情報社会を
生き抜くために！



5

外国人もいますよね。長い間、図書館はなんとなく日本人だけを対象に考えてきたんですが、実際にはどんな地域にも外国人が住んでいる。それから、たまたまそこに来た旅行者というの也有いますよね。観光目的の方もいれば、仕事の目的で来ている方もいらっしやいます。田原の場合にはトヨタの田原工場があり、そこには数か月の単位で来ている期間工の方々がいます。そういう方々は住民登録しないし、図書館以外である意味、お金も使わず安心して過ごすことができる場所はありませんから、とてもよく図書館を利用されます。そういうような方々も、旅行者といったときには含めることができるかもしれません。

それから、小さい子どもさんたち、あるいは障害をお持ちの方、それからホームレスの方など、自分が生活自立していくための手段が何にもない、そういう方々も、もし、何か知識を望む、あるいは、必要な情報があれば、普通あると思うんですが、望みに応じて必要な知識、望む情報を手に入れることができる、それを使命としているただ一つの機関、これが図書館ということになります。

1-2 図書館はどうやって必要に応えるの？

読書&学習支援

課題解決支援

- 読みたい・学びたい!
- 読めるようになりたい!
- 読む(学ぶ)仲間が欲しい!

...に応えます。

- 解決のヒントを探したい!
- 解決する仲間が欲しい!
- 課題を皆に知ってほしい!

...に応えます。

◇1-2 図書館はどうやって必要に応えるの？

いま、情報社会、知識社会、最近、文部科学省が図書館の設置及び運営に関する望ましい基準というのを改訂して告示で出しましたが、その望ましい基準の中で使われている言葉をそのまま使えば、知識基盤社会、知識が社会の基盤になっている、そういう社会です。そういう社会においては、情

報・知識を手に入れることができるかどうかということが、生きていくためにはどうしても欠かせないことですし、それが誰に対しても認められている、誰でもそれが保障されているということでない、本当に平等な社会、民主主義の社会とはいえない。そういう社会になるために必要なもの、これが図書館であるということです。

■2 課題解決支援の三つの局面

◇2-1 課題への気づきと共有

では、その図書館はどうやって必要に応えるのかということで、三つの支援ということを申し上げています。

読書を支援する、学習を支援する、そしてもう一つ、課題解決を支援するということです。読書支援、学習支援は、図書館ができてからずっと図書館の役割と言われてきましたから、

ここはあまり説明する必要がないかもしれませんが、当然、いろんな人たちの読みたい、あるいは学びたいという欲求に応えていく、ということが大事です。

それから、これはちょっと忘れられがちなことですが、読めるようになりたい、学べるようになりたい、と思っている方もいらっしゃる。いま、読む条件が充分整っていない、たとえば視覚障害、目は見えるけれどもいわゆる学習障害、あるいは、文字の意味が読み取れない方々、ディスレクシアという言葉がありますが、そういう方々が読めるための支援というのがある。あるいは日本に来てからだいぶ時間が経つんだけど、日本語の教育を受ける機会がなかったのだから文字が読めない、あるいはいろいろな事情で学校に行けなかったために文字が読めません、という方もけっこう日本でもいらっしゃる、そういう方々への支援、これら全て、読めるようになりたいことに応える、図書館の大事な役割です。それから、一緒に読んだり学んだりする仲間がほしいというのもありますね。読書会、あるいは読書サークルといったものはいろいろありますが、その仲間集めに協力していく、支えていくというのも図書館の大事な役割なんです。

◇2-2 課題の解決（狭義の課題解決）

三つ目の、課題解決支援、これはいったいどういうことかと言いますと、私たちは生きてる限りいろいろな課題というものがあります。例えば、健康で暮らしたい、法律のトラブルに巻き込まれて、何とか切り抜きたい。あるいは、仕事でも、知識が必要になります。まちづくりなんかもそうですね。

ちょっと変わった例をお話すると、田原市の図書館で実際にあった話ですが、田原は農地帯で、けっこう動物を飼ってる方が多く、犬好きの方も多いんですが、あるとき、ご自分の飼っている犬が、出会い頭に別の人が飼っている犬にかまれて死んじゃった、非常に悲しい思いをしている、何とかならんだろうかということで相談にみえました。その方に、いまペットロスということが言われている、そのための心のケアの本もいろいろ出てますから、そういうものを図書館の職員が紹介しました。

しばらくして、別の方がみえて、実は私の飼っている犬がある人の犬を出会い頭に噛んで、その犬が死んじゃった、どうも法律的なトラブルになりそうだということで相談にみえました。法律に関しては、いろいろ動物についての法律の本があるからご紹介しましょう、さらに法律トラブルについては、無料でいろいろ相談できる、法務省などがバックアップしている サービス、法テラスといったものもありますから、ご紹介しましょう、とご案内しました。

たぶん、このお二人はお互いに被害者と加害者だと思うんですけども、そういう相談が来るということ自体、だいぶ田原の図書館も、読書や学習の支援だけでなく、課題解決支援ということに使われるようになってきたんだね、と話をしましたが、それは、ちゃんとバックアップするために、例えば法律に関する情報提供、あるいは、精神的ないろんな問題が必要になるし、職員もそれなりのある程度の知識も必要になるということですが、そ

んなふうなことが課題解決支援の場合にはあるわけです。

2-3 対話が生み出す学びとコミュニティ形成

- 課題を共有する人と人のゆるやかなつながりの場ときっかけづくり
- ゆるやかな人のつながりをベースとした、課題解決に向けた議論と行動のきっかけの提供
- インターネット、ファシリテーションなど、つながりの技法の開発と活用

◇ 2-3 対話が生み出す学びとコミュニティ形成

それから、解決のヒントを探したいという方も、当然大勢いらっしゃると思います。同時に、一人ではなかなか解決できない、地域づくりなどだと、一緒に解決に向かっていく仲間がほしい、ということもあります。

例えば映画会、前回の嶋田さんがお話しに

なったと思いますが、環境問題についての映画会を開いて、そこに集まった方が環境を守るグループをつくった、そんな役割も図書館は果たしうるし、果たしていくべきでしょう。それから、当然、いろんな課題をみんなに知ってほしいということもあります。これはまた後で 実際の田原の図書館を説明する中で触れたいと思います。

じゃあ支援というのはいったい何のために行うのかと言うと、結論だけ言ってしまうと、個人、あるいは地域が自立をしていくことを支える、ということです。自立を支えるのが、図書館の大きな使命であると言えます。

最初にお話ししたことに戻ってしまうかもしれませんが、人が自立して生きるため、つまり、自分の意思で、自分のやるべきことを決定していくにはどうしてもいろんな知識や情報が必要だと、でも自分一人で持てる知識・情報、あるいは、自分一人で持てる本には限りがあるわけです。いくらインターネットがあるからと言って、インターネットで調べられる情報だって、自分の持っている知識やスキルにどうしても限定されてしまうわけです。そうするとやはり外部の力を借りなければいけない、その力をお貸しするのが図書館ということになるわけです。

ここで課題解決支援の三つの局面というお話ですが、お話ししているといくらでも時間を使ってしまうので、あとで具体的な図書館のお話とからめて説明していきたいと思います。後ほど、田原市の図書館のフェリーに関する展示という話をしますが、これは実は課題への気づきと共有ということに深く関わっております。図書館がいろんな地域の課題について、いろんな人に気づいていただく、また、地域の人達にそういう気づきを共有していただくという役割も持っています。

それから課題の解決そのものへの協力ということですね。課題を解決していくためにはいろいろな知識や情報が必要 知識情報を届けることもありますし、そういうことに使えるんだよということをいろんな人に知っていただくことも大事になってきます。

これは後で「元気はいたつ便」という田原の事業の話で触れていきたいと思います。

それから、いろんな課題に気づいた方々同士が対話をしていく、そしてそこから市民のいろいろな課題解決のためのつながりが生まれてくる、コミュニティが生まれる、そのき

っかけも図書館が提供していく、ということがあります。これについては田原の図書館のふしぎ文学半島プロジェクト、ブックフェスタというような事業に取り組んでおりますので、その説明の中で掘り下げていきたいと思います。

■ 3 田原市図書館の取り組みから



田原市は愛知県が一番東の方です。東三河と呼んでいますが、東西約30キロの半島があります。この半島の大部分が田原市ということになります。その田原市のいちばん東の端の方に一番大きい中心街があり、田原城というお城もあり、

中央図書館があります。他に赤羽図書館と、渥美図書館という、この二つは分館ですが、三つの図書館と、市内を巡回している2台の移動図書館車、これが田原市の図書館のシステムです。

ちなみに、渥美半島の西の先端に伊良湖岬というのがあります。ここはけっこう観光地で、島崎藤村の椰子の実の歌がありますが、あの歌に出てくる椰子の実が流れ着いたのが実はここで、拾ったのは民俗学者の柳田國男で、その話を島崎藤村にしたら、島崎藤村はそこに行っていないんだけど、あの歌をつくったということです。

向かい側が紀伊半島、三重県で、鳥羽というまちがあります。この間をフェリーが行ったり来たりしている、主に観光のためのフェリーですが、そんな町です。

◇ 3-1 田原市と図書館の概要

田原市は人口は6万6千人、農業と工業のまちです。もともとは農業が盛んなところで、花とか野菜が有名、中でもキャベツはとってもおいしいです。ほかにもブロッコリー、トマトなど、トマトはこちらも非常に有名なようですが…

あと、さっきお話ししたようにトヨタの田原工場というのがありますので、工業のまちでもあります。3町が合併して今の田原市になりました。非常に風が強いところで、風力発電が盛んなのと、太陽光発電なんかかなり大きい本格的なものが次々とできる計画が進んでおります。環境と産業と社会的安定度の三つが一致している町ということで、日経新聞の全国サステナブル調査というので昨年度第一位になっています。ちなみにその社会的安定度の指標の一つとして図書館の蔵書数というのがありますので、図書館もけっこう貢献しています。

それから貸出密度、これは人口一人当たりの貸出数ですが、一人当たりですと年間14点借りているので、愛知県の中でも2位、非常に図書館活動がもともと活発、盛んな町です。今の資料費は3千5～600万円です。

◇3-2 中央図書館開設の経緯

中央図書館の開設の経緯ですが、図書館づくりの話ということでここで触れておきますと、いまの中央図書館が旧田原町にできたとき、町民参加で全部で9回「情報広場」というのを開いています。これは図書館を設計している方、役所の図書館担当者、図書館をつくらうという活動をしていた市民の方の団体と、三者が勉強会をしたり、いろいろな見学会をしたり、現場の現地見学をしたりといったことを9回ほど重ねて、さらにその間に小さいミーティングをたびたび行って、その中でだんだん図書館のビジョンや、具体的にどういう図書館づくりにしていくのか、あるいはサービスをやっていくのかをかためていって2002年に開館しました。

特に図書館をつくった市民のみなさん、図書館フレンズたはらという団体をつくったんですが、その図書館フレンズたはらが中心となってNPOたはら広場というのをつくり、市民のいろいろな活動の中心となっています。

リサイクルブックオフィスという、お店を図書館の複合施設の中につくっており、市民が寄贈した本や図書館が除籍した本を1冊50円で販売しています。年間の売上が20万円

ほどになってますので、図書館振興のために使ってくださっています。

図書館自体は教育委員会の事務局の課という位置付けになっていて、私は教育委員会の課長ということになります。議会でも答弁をしますし、去年は2回、いわゆる事業仕分けのプレゼンもやったりしました。今日使っている資料もそのプレゼンの資料が実は入っています。

中央図書館外観



(中央図書館外観)

これは中央図書館の外観、中央図書館 文化会館と情報センター、体育館そして市民活動のためのフリースペース、の複合施設になっています。市民協働課という、市民と行政の協働をすすめていく課のその窓口もこの中にあります。

(中央図書館開架)

これは中央図書館のオープンスペース、一階の開架フロアです。

中央図書館開架



移動図書館で小学校20校巡回



(移動図書館で小学校20校巡回) 先ほど移動図書館車が2台あると言いましたが 市内に小学校20校もあります、人口に比べると多いんですが、この20校全てに月2回、移動図書館が巡回しています。なかなか図書館に来られない小学生はやはり多い、小学生は自力では移動できませんので。

さっき、日高村の小学生の投書(別紙資料-新聞記事

①) がありましたが、ああいうことは深刻だと思いますので 移動図書館車が巡回する一方、学校図書館も学校司書が入り充実してきていますので、子どもたちの読書環境は、田原の図書館ができてから非常に向上したと思います。

だいぶ図書館の貸出利用だけ見てると横ばいになってきてるんですが、移動図書館だけは、相変わらずぐんぐん利用が伸びている、そういう現象が起こっています。

(再発見！鳥羽⇄伊良湖フェリー展)

これは鳥羽・伊良湖フェリー展、私が田原に参りました2010年に廃止という話が起りまして、そうすると田原の半島が袋小路のようになってしまうので、危機感が高まり、何とか市を挙げて廃止されないようにしようという運動が行われたんですが、そこで図書館も田原の図書館と、対岸の鳥羽市の図書館が協力しましていろいろな展示、たとえばフェリー会社から船の模型を借りてきたり、田原と鳥羽の歴史的なつながりを説明するパネルを作ったり、あるいはお互いにフェリーを使って三重県へ行こう、渥美半島へ行こう、という観光パンフレットを置いたりポスターを展示したりもしました。

再発見！鳥羽⇄伊良湖フェリー展 2010.7.7-9.9



震災関係情報サービス 2011.3



これはかなり話題にもなりましたし、役所の中でも、図書館ってそういうことができるんだ、そういうふうに地域の課題にアプローチもできる、地域の課題にいろんな人に気づいてもらう、あるいは共有してもらえんという役割が果たせるんだ、というふうに認識が変わりまして、それ以降、たとえば、子育て支援、あるいは農業のブランド化など、いろいろな展示企画や市民の方々のメッセージをもらって、行政の各部局に届けていく、そんな事業が協力して行われるようになっていきます。

(震災関係情報サービス)

田原の図書館に来てちょうど一年経とうというときに東日本大震災がありました。課題解決をやっている図書館全体がなってきたところに震災が起きたわけです。その日はちょうど休館日だったんですが、正職員はみんなヘルメットをかぶって防災服を着て、深夜まで図書館に詰めていました。テレビはないんですが、パソコンでNHKのニュースを見ながら、これはすごいことになってる、と思いました。田原も実は津波の被害を受けています。人は亡くなっていませんが、漁港が津波で襲われて一億円くらいの被害が出ています。かなり危機感が高まることは容易に予想できたので、明日から展示をやろうということになりました。たとえば支援のボランティア活動をするにはどうしたらいいか。また、どうしたら自分たちが津波に対して対処できるか、そういう情報をインターネットでも集め、本も用意して、翌日から展示し、図書館のホームページに出した情報はどんどん更新して行って、さらには、東北を知るための展示をしたりということを行いました。これも図書館の、課題解決へ向けての役割として知っていただく上では大きい意味があったと思います。

（げんきはいたつ便）

これは、「元気はいたつ便」という事業ですが、その名のとおりに元気をあちらこちらに配達するんですが、どこへ配達するかというと、市内の高齢者の介護施設を巡回する事業です。2010年の秋ですか、総務省が住民生活に光をそそぐ交付金というのを出すので、図書館の中でも使うようにと全国に通達をしたわけですが、その時に図書館としては、なかなか自前の予算ではできない、そんなことを図書館でできるの？というような事業をやりたいね、ということで、どんな事業をやればいいのか職員に聞きまして、コンペティションのようなことをやったんですが、その結果、図書館に来れない人たちのための事業を一つやりたいね、となりました。

来れない人が一番たくさんいるのはどこかということ、高齢者介護施設なんじゃないか。そこへ行って何をするかということ、そこにいらっしゃる方が元気になる、たとえば認知症にならない、健康でいるということが結果として町の財政にもプラスになってくるし、もちろん自立にもつながるわけだから、そういうことにつながるのをやりたい、となりました。高齢者施設を巡回して、たとえば本の貸出や、かみしばいや民話の読み聞かせもやっていますが、懐かしい、いろいろな道具や写真を持って行って、お年寄りの方々に実際に見たり手に触れていただいて、そうするとああこれはこういう目的で使ったね、なつかしいね、という話が出て来ます。そういう話をしていただくということが、認知症、介護予防に効果があることが最近わかってきています。専門用語で「回想法」といいますが、それを行うということにしました。

元気はいたつ便 2011.8-



博物館に話をし、博物館で持っている民具、展示はしてないがたくさんストックがあります。それを貸出をするシステムを整備しまして、持って行きました。(画像の)箱膳、こちらの方でも使ってたかね、お膳の中に食器を並べてご飯を盛りつけて食べる、箱膳というのがあります。たとえばですけど、そういったものを見ていただき、いろいろと話をさせていただく。こちらにいらっしゃる方はみなさん目が不自由な方ですが、手でさわれますので、これはこういうふうに使ったよね、という話がでてくるわけです。回想法は専門家の方もいらっしゃいますので、大学の先生をしてらっしゃる方に来ていただいて、職員も研修を受けて、現在もやっております。最近、そういうことがありますので、高齢者介護施設の職員の方から、こういう資料はないでしょうかとか、こういうことをしてもらえないかとか、相談が非常に増えてきています。

(農産物ブランド化展示)

これは、農畜産物のブランド化に関する資料を、関係課から頼まれて集めて、ただ集めるだけではもったいないので展示もしています。



(iPad 貸出と全館全フロア公衆無線 LAN 接続開始)

館内全体に公衆無線 LAN、W i - F i というふうに言いますが、接続できるようにしています。こちらも光をそそぐ交付金を使ってやった事業です。

田原も田舎ですので、スマートフォンとか i-pad などを持っていても、W i - F i がつながるところが中央図書館のある田原文化広場を除けば市内一カ所だけ、マクドナルド、そこへ行かないとない、というような状況だったので、三つの図書館すべてがそれを提供することで、地域の通信環

境が向上するはずである、ということでやっています。実際、たとえば新聞記者の方が、田原市には支所がないんだけど、ここずっと仕事をしている、ちょくちょく図書館にも立ち寄って、なんか面白いことないですかね、などと話をしていく、という感じになっています

日高村のホームページで総合計画の資料を読ませていただいたときに、村民のみなさんが通信環境について、もっと充実してもらいたいという意識を持っておられる、というふうに読みとれたんですが、図書館がそういう役割を果たすことができるという面もある、ということですね。

(開館 10 周年イベント「たすきでつなぐ渥美半島」)

トヨタの田原工場の話をしてしましたが、長距離陸上部が拠点にしてまして、非常に強い、駅伝なんかでも活躍してますが、たまたま今年度から全国駅伝大会の中部北陸大会の予選が渥美半島で行われるようになりまして、田原図書館の開館 10 周年とからめてメインイベントということでいろいろ展示をし、市民のメッセージを募り、選手やコーチが読んでる本なども紹介する、ということをやっています。

(乳がん展示@健康情報コーナー)

健康情報、やはり課題解決の中でも健康に関する危機意識は非常に強いです。総合病院が一つ、あるにはありますが、市の東の端の方になり、しかも精神科などはお医者さんがずっといないという状況で、地域における医療過疎問題は田原も例外ではない。

その中で、一つは住民のみなさんが使える医学に関する資料を提供してい

こうというのがありますし、もう一つは、医療従事者、例えば看護師さんなんか医学の資料はほしいわけです。自分たちがキャリアを充実していくのに。ちょっと高度な医学書なんかでも、両方の方向けに使えますので、こんなに難しいのどうなのかな、と以前は言われていたようなものも、田原市としては資料として入れていくようにしています。実際、けっこう相談があるわけです。たとえば、病院でお医者さんに何とか病と言われたんだけど、病気の名前だけ聞いてもよくわかんない病気について調べたいとみえるかたがいるわけですね。しかしそのメモ自体が間違っていたりすることもよくある。お医者さんもあんまり人づきあいが上手な方ばかりではないので、早口で説明されて、聞くに聞けず、ちょっとあいまいなメモを取って、やっぱりちょっと納得いかないところあるからもうちょっと調べてみようという、いわゆるセカンドオピニオンを、取る前提としての情報収集をする、基本的な知識を仕入れたり、この分野にはどういうお医者さんがいるんだ、どういう病院が強いんだ、というようなことを調べる時にも図書館は実は使えるんです。

これは以前いた静岡市立図書館の話ですが、医療過誤について、法律トラブルになったりすることもあるんですが、弁護士さんのところに相談に行ったら、判例を調べる必要があるんだけど、判例は図書館で調べてくださいと言われた、というお客さんが何度かみえました。

開館10周年イベント「たすきでつなぐ渥美半島 図書館から沿道へ！！」 2012.10-11



ふしぎ文学半島プロジェクト 2012.11-



(ふしぎ文学半島プロジェクト)

ふしぎ文学半島プロジェクト、これは、渥美半島は、さっきお話しした柳田國男や泉鏡花なんかゆかりがあるので、図書館で田原の新しい、面白い物語を発掘して、図書館ならではの地域ブランドづくりへの貢献をしてみたい、ということで、図書館だけでなく観光課とか、あるいは東京などのその分野で有名な文化人や出版社とも相談して、少しずつ進めている事業です。

今年はシンポジウムもやりましたし、かなり資料も揃えて展示もやっております。
資料には入ってないですが、ブックフェスタという事業を図書館で取り組みをしております。来年度が市制10周年、今年は開館10周年だったんですが、来年度は市制10周年に合わせて、市民参加の事業、市民と行政が共同で積極的につくっていく事業をやりたい、
ついては図書館がやってくれないかという要請を受けました。田原で一番親しまれている施設は今や図書館だから、図書館で企画をしてくれ、と言われ、大変だなと思いながら、さっきお話しをしたNPOたはら 図書館フレンズ田原の方々に相談をして、いま実行委員会の立ち上げを準備しています。その実行委員会の中にはたとえば書店の方々も入ってきますし、環境とか、まちづくりのようなことをやっている団体、商店街のにぎわいづくりをやっている方々も入ってくる予定になっています。
そういう方々と地域の課題に対して、本を読んだり、図書館を盛んにしたりということがどういうようにプラスになるかについて話し合いながら、新しいコミュニティーづくりですね、そういうことをブックフェスタをきっかけにしてやっていこうと取り組みをしています。

■ 4 これからの市町村図書館の役割と可能性

◇ 4-1 「図書館の設置及び運営上の望ましい基準より（1）」

これからの市町村図書館の役割と可能性ということですが、先ほどお話しした図書館の設置及び運営上の望ましい基準、去年暮れに文部科学省が改正の告示をしました。その中では地域の情報拠点なんだよ、ということが強く謳われております。これはあきらかに、課題解決支援ということを文部科学省も意識しているということなんです。

4-1 「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」より(1)

市町村立図書館は、知識基盤社会における知識・情報の重要性を踏まえ、資料(電磁的記録を含む。)や情報の提供等の利用者及び住民に対する直接的なサービスの実施や、読書活動の振興を担う機関として、また、地域の情報拠点として、利用者及び住民の要望や社会の要請に応え、地域の実情に即した運営に努めるものとする。

(平成24年12月19日 文部科学省告示)

4-1 「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」より(2)

<地域の課題に対応したサービス>

市町村立図書館は、利用者及び住民の生活や仕事に関する課題や地域の課題の解決に向けた活動を支援するため、利用者及び住民の要望並びに地域の実情を踏まえ、次に掲げる事項その他のサービスの実施に努める...

ア 就職・転職、起業、職業能力開発、日常の仕事等に関する資料及び情報の整備・提供

イ 子育て、教育、若者の自立支援、健康・医療、福祉、法律・司法手続等に関する資料及び情報の整備・提供

ウ 地方公共団体の政策決定、行政事務の執行・改善及びこれらに関する理解に必要な資料及び情報の整備・提供

◇ 4-2 「図書館の設置及び運営上の望ましい基準より（2）」

市町村立図書館は住民の生活や仕事に関する課題や、地域の課題の解決へ向けての活動の支援をするんだよ、そのためのさまざまなサービスを実施して

いく。たとえば、就職・転職・起業、職業能力の開発、日常の仕事、子育て、教育、若者の自立支援、健康医療、福祉、手続き、地方公共団体の政策決定、行政事務、このへんはいわゆる地域づくりですね。そのための資料を集めたり、情報整備、提供する、これが図書館の役割、ということなんです。これは単に文部科学省でつくったということではなく、つくる過程でいろんな方々、図書館関係者だけでなく、図書館に関わりのある住民の皆さんもかなりパブリックコメントをされてます。それがかなり反映されてこうなっている、その意味で非常に無視できない内容になっていると思います。

4-3 小さなまちの図書館は地域づくりの最前線基地！

- 政策推進課の幹部(国交省派遣)曰く、「市役所の中でも一番アグレッシブな部署！」
- 図書館は市職員の主な情報入手経路の一つ。(新聞記事、リクエスト、昇進試験...)
- 図書館という場を使って、行政と市民がコミュニケーション。
- 観光施設以上に「連れて行きたい施設」。

◇4-2 小さなまちの図書館は地域づくりの最前線基地！

あらためて申し上げたいのは、小さな町の図書館は地域づくりの最前線の基地なんだ、ということです。実際、田原の場合、政策推進課の、国交省から派遣された方で、図書館への見方が変わった、とおっしゃってます。市役所の中でも一番アグレッシブな部署なんだ、という言

い方もされてます。アグレッシブ、攻撃的、というようなことですが、ほめことばと受け取っています。市の職員の方もすごくよく図書館を使っています。幹部職員の方もよくみえるし、たまに市長も顔を出される、議員さんもけっこう使ってらっしゃいます。今や、市の職員にとって、図書館は主な入手経路の一つなんです。新聞記事も、いろいろな地域に関する記事は図書館でクリッピング（切り抜き）し、その見出しのデータベースも作っています。インターネットでも見られます。図書館にいろいろな地域づくりの専門的なリクエストをされる方もいらっしゃいます。おもしろいのは、昇進試験の時期になるとリーダーシップとか、地方自治の課題とか、そういう本がごっそりなくなるんです。なんで借りられているかという、レポートの試験があって、みんな借りていくんですが、非常にありがたい使い方だと思います

パブリックコメントが出ると、必ず関連する資料を展示して、それに限らず、さっきの農業ブランド化みたいな展示をして、それに対する市民のメッセージをいただき、掲示する。図書館が行政と市民のコミュニケーションの場になっています。

以前、面白いアンケートがあったんですが、どういう施設に、外から来た方を連れていきたいですか、というアンケートで、市内のまつり会館、祭りの山車などを展示している施設がありますが、図書館がそこを超えちゃったんです。要するに図書館は市民だけの場ではなく、外から来た人にも開かれている場であり、私も実際、田原に引っ越したときに、いろいろな地元の情報を集めるのに使ったのは図書館でした。観光パンフレットなんかは全部揃っていますので。連れて行きたい施設としての図書館ということです。最近、非常に

話題になっている長野県の小布施町立図書館、今日の会場の中に掲示がありますが（読もう会の研修記録パネル）嶋田さんが担当しておられた東近江市の永源寺図書館、ああいう所も、連れていきたい場所、という感じが非常に強いんじゃないかと思います。

◇４－４ 子どももお年寄りも障害者も、安心できる居場所

子どももお年寄りも障害者も安心できる、唯一の居場所と言っていいんじゃないかと思います。誰でも入れる場所、こういう意味合いも非常に強いです。

日高村のホームページを拝見していると、いじめ問題を教育長さんも重要な課題と書いておられましたが、いじめ、体罰、は学校だけでなく職場でもありますし、地域の中でもそういうことがないとは言えないし、いろいろな場であるわけです。そういう時に、一人でいても拒まれない、そして居るだけで教養が高まる場所が図書館だということは非常に大事なことだと思います。

公衆無線LAN、ネットカフェというような、大都市にあるようなしゃれたものがなくても地域間の情報格差にも対応できるし、防災でもスマートフォン、SNSサービスなんかを使う、東日本大震災ではツイッターが大活躍した話がありましたが、防災拠点になるためにもこれは重要な役割を果たすと思うので、そういう拠点にもなりうると思います。

◇４－５ 図書館こそ、情報の海のナビゲータ

また、電子書籍というのが非常にいま話題になっています。2010年が電子書籍元年といわれ、実は今まで歴史的には電子書籍元年と言われたことが何度かあったようですが、今度こそ本当の元年だということで、電子書籍が普及していく流れが見えてきていますが、実は電子書籍が普及しても、全てが電子書籍になるということはなかなかないと思いますし、電子書籍そのものもいろんなタイプが実はあるんですね。これは、電子書籍に全部紙から移行してしまうということではなく、メディアが多様化することなんです。

図書館は今までもそういうことに対応してきているわけです。 ということかと言うと、障害者向けのサービス、活字が大きい本もあれば、本を拡大して見る機械もあれば、点字、録音したテープ、CDやDVDもある、そういうものを使って本を提供してきたわけです。あなたにはこういう方法が一番適していますよね、というナビゲーションを図書館は今までやってきた。これを今度はもっと広い範囲の方々に最適なメディアをナビゲーションすることが図書館の役割になってきています。

図書館そのものが、さらには電子書籍の供給源になっていくということもあります。いま田原の図書館でも実際に、観光なんかの今までスポットが当たっていなかった地域を紹介する本を電子書籍としてまとめるというプロジェクトを大学と共同でやっています。その文化資源を編集・保存・発信する、これが図書館の新しい使命になってきています。さきほど、地域の写真を集めてパソコンに蓄積なさっている（新聞記事で紹介）方の紹介がありましたが、そういうことを図書館としてやっているところも出てきていますし、利用方

法のひとつとして、さっきの元気はいたつ便の事業もあり得る。そういう可能性が広がってきている、情報の海のナビゲーターが図書館であるということです。

■ 5 図書館をどう立ち上げるか



- できるだけ早い段階から図書館の専門家（準備室長すなわち館長候補）を置くべき。外からの招聘の事例も多い。
- 広範な人々の議論は大切。できれば会議の専門家＝ファシリテーターを立てて。
- 複合は横連携のメリットを最大に、弊害を最小にするためのコンセプトとコミュニケーションが大切。（塩尻市の成功例）

33

図書館の立ち上げに関して簡単に触れておきますと、つまるところは、最初の段階で、さっき主催の団体（日高読もう会）の方がお話をされていましたが、どういう風にして図書館の理念・目標をつくっていくのか、どういうふうにビジョン、あるいは基本計画に落としていくのかという段階が非常に重要だと思いますが、そこでポイントに

なるのは、できるだけ早い段階から図書館の専門家をおくべきである、ということです。それから、広範な人々の議論が大切ということです。やはり会議というのはなかなか難しい、会議の専門家という方もいらっしゃいます、ファシリテーターと呼びますが、そういう人もお願いしてうまく運営していく、創造的な会議にしていくということが大事ななと思います。

それから、複合ということも当然考えていく必要があると思いますが、その時には横連携をやっていく、そのメリットを最大化していく、それから弊害を最小化していく、そのためにコンセプトづくりからいろいろな関係者が広範な議論をしていくと同時に、コミュニケーションも良くしていくということです。

長野県に人口7万人くらいの塩尻という町がありまして、えんぱーくという、市民協働を前面に出した図書館の入った施設というのをつくっています。ここは最近の試みの一番成功している例と言えるのではないかと思います。Webサイトで基本計画なんかも読めますので、ご研究いただけると良いかと思います。



終わり

ご清聴ありがとうございました。
この場で解決できなかった疑問に関するお問い合わせは、田原市中央図書館
豊田高広宛にメールでどうぞ。

toyoda-takahiro@city.tahara.aichi.jp
※Twitter: <http://twilog.org/Shokotei>
※Facebook:
<http://facebook.com/takahiro.toyoda>